

である。

一方で昨年は、一連のオウム事件の首謀者をはじめとする相次ぐ死刑執行が話題になった年でもあった。そんななか関連の本も相次いで出版されているようだが、とりわけ印象に残ったのは、一昨年のジャック・デリダの講義録『死刑Ⅰ』（高桑和巳訳、白水社）につづく、次の二冊、気鋭の力作論文のそろった『デリダと死刑を考える』（高桑和巳編、白水社）と、ヴィクトル・ユゴーの古典『死刑囚最後の日』（小倉孝誠訳、光文社古典新訳文庫）である。複数の領域にまたがけるこれらの議論をわたしはまだ十分に消化しきれていないと言えないが、いかなる大義名分が立つとしても、人が人を殺すというのは、やはりどこか生理的に受け入れがたいところがある。

斎藤成也  
(人類学)

- 1 真弓常忠『古代の鉄と神々』ちくま学芸文庫、二〇一八年
- 2 小林達雄『縄文文化が日本人の未来を拓く』徳間書店、二〇一八年
- 3 日下宗一郎『古人骨を測る——同位体人類学序説』京都大学学術出版会、二〇一八年
- 4 川本皓嗣編『対訳 フロスト詩集』岩波文庫、二〇一八年
- 5 富田浩司『マーガレット・サッチャー——政治を変えた「鉄の女」』新潮選書、二〇一八年

測るのは、炭素、窒素、ストロンチウム同位体の比率である。特にストロンチウム同位体を測定した結果、従来考古学で唱えられていた抜歯バターの解釈の一部がまちがっていたらしいと判明したことは、同位体人類学のおおきな成果である。

4 家人ともども尊敬している著者からいただいた。オバマ前米大統領来日時の晩餐会で彼がフロストの名前を知っていたのでうれしくなりましたよと、著者からお聞きしたことがある（岩波書店の『図書』でも川本先生が言及されている）。「Out, Out...」（消えろ、消えろ）」は、詩と死がつながっていると若い時から考えていた私なので、死そのものをものがたる興味深い詩だった。

5 二〇一一年にチャーチルの伝記を刊行した著者が、こんどはサッチャーの伝記をイスラエル大使時代に執筆してこのほど上梓した。私は両政治家とも尊敬している。実はまだ本書を全部読んでいないのだが、「序にかえて」と題された冒頭から読者を魅了すること、また、彼女と母親との関係が微妙だったことをうかがわせる記述など、多くの個人的関係が語られているのは、本書の魅力のひとつであろう。私はフォークランド戦争当時米國に留学していたが、英国の女性首相があの戦争を勝ち抜いたことに拍手を送ったものだ。

伊佐眞一  
(沖縄近現代史)

- 1 もろさわようこ(文)・比嘉豊光(写真編集)『上井幸子写真集 太古の系譜——沖縄宮古島の祭祀』六花出版、二〇一八年
  - 2 阿波連正一『沖縄の米軍基地過重負担と土地所有権——辺野古の海の光を観る』日本評論社、二〇一七年
  - 3 徐京植、高橋哲哉『責任について——日本を問う20年の対話』高文研、二〇一八年
  - 4 パウル・フレリヒ『ローザ・ルクセンブルク——その思想と生涯』伊藤成彦訳、御茶の水書房、一九八七年
  - 5 北郷隆五訳『ローザ・ルクセンブルクの手紙——ゾフィー・リーブクネヒトへ』青木書店、一九五二年
- これまでずいぶんと沖縄を撮った写真をみてきたが、ヤマトウンチューがこれほど肩肘張らず自然に沖縄を映し取ったのは、ほとんど記憶がない。私はこの写真家に会ったことはないが、どんなひとだったのか、何となくわかるような気がする。カメラのレンズという膜をちっとも感じさせない眼が、宮古の人たちのなかにさりげなく溶け込んでいる。
- そうした変化に乏しい淡々とした日常が、2の専門書になると、いかにも新聞の第一面に引き戻された感覚になる。ヤマト防衛とアメリカのアジア戦略のために、軍事要塞化が

いと思った。また、合金である青銅よりも鉄のほうが歴史的に古い可能性がますます強まったように思える。再刊とはいえ、著者九〇歳を超えての出版に深い敬意を表する。

2 火炎土器で知られる新潟県出身で縄文研究の第一人者が語る縄文文化。狩猟・漁労・採集を三本柱として定住をはじめた縄文人だからこそ、重い縄文式土器を作りだしたのだ。著者は春分と秋分を縄文人が重視したと説くが、まさにこれらの日が国民の祝日になっている国家は、世界で日本のほかにどれぐらいあるだろうか？ これらの祝日そのものは明治時代に制定されたようだが、日本文化の根っこに縄文文化があることの証拠ではなからうか？

3 静岡県にあるふじのくに地球環境史ミュージアムに在職している新進気鋭の人類学者が自身の博士論文を単著として発表したものだ。

すさまじい勢いで強要されているいまの沖縄に、である。そして読む者の気持ちが一気に波立つ。いまは亡き上井のふれた穏やかな空間は、自衛隊基地が傍若無人に拡大している宮古と八重山はむろんだが、もう沖縄全体が無残に切り裂かれていく。そうした日本の草刈り場になってすでに七〇年余。著述の根幹に法学者らしい楽観さがなくもないが、沖縄は日本のなかの「植民地」だとの躊躇もなく言い切る著者に、いったいどんな思念が渦巻いてきたのか。

いまや書店に行けば、現実政治の論説をはじめとして、学術の世界でも琉球・沖縄に関する印刷物が溢れている。しかし大方はアブックのようなもので、いっけん進歩的で沖縄に寄り添う恰好はしていても、一皮剥けば自己満足か、「ヤマトのための沖縄」が透けてみえる。3を手にしたのは、かくなる状況、情報空間を日々これでもかと思えられているからでもあるが、しょせん紙に書いたもの、口にしたものは、実際の行動であらわになる。対話の内容もさることながら、両者のこれまでの自己形成を思わずにはおれなかった。

4と5は、何をいままらこんな古いものといぶかる向きがあるかもしれないが、私には近年とみに思い返される女性革命家であった、自立した言論と行動とは何であるかを確認するだけでも意味がある。激しい時代を